南極から附中へ

南極観測隊員のつぶやき

令和２年度 愛知教育大学附属岡崎中学校
校長通信　第 27 号　令和２年５月 26 日

〇南極に挑戦した観測船たち

・観測船シリーズの最後として、南極観測船「しらせ」についてお話します。「初代しらせ」に続き、現在使用している観測船も同じ船名を使用しています。船番は 5003 です。この観測船は 2009 年から使用しています。初代と比べて、連続砕氷して進むことができる海氷の厚さは変わりませんが、船首から海水を放出する装置が付き、積雪による衝撃の吸収を減らすことができるようになりました。運べる物資量も 1,100 トンになり、大型の観測装になり、大型の観測装置の運搬・燃料の増加に対応できるようになりました。その他、増えた装備として、南極圏の環境へ極力負荷をかけないために船内で発生した廃棄物を船内処理できるようになっています。また、これまで女性観測隊員はいましたが、この観測船から女性用リネン室・浴室・トイレが作られ、乗員側には女性用区画も作られました。砕氷船として３隻目となり、多くの技術と経験を統合して建造された「しらせ」ですが、南極の自然は経験通り行かず、これまでに２回、昭和基地に接岸できていません。２年連続だったため、燃料を十分に輸送できず、観測の縮小を考えたそうです。

＜昭和基地沖に停泊中の「しらせ」＞
観測船と基地の間は雪上車で移動し、観測物資を運ぶ
燃料はパイプライン（ホース）で輸送される
重い観測物資は気温が下がる深夜（しかし白夜）に実施される

「しらせ」とそのあとに続く砕氷した航路

砕氷によって塗装が剥げた船底